河合　雅司（著）

『縮んで勝つ 人口減少日本の活路』

（小学館）

島根大学　教育学部
教授　**作野　広和**

本書は、日本人の少子化とその結果もたらされる危機について、現状把握、未来予測、対応戦略を提示した一般書である。内容は、非常にわかりやすく文章も平易であるため、一気に読み進めることができる。著者は、『未来の年表』シリーズをはじめ、人口減少が続く日本社会に対して多くの提言を発信してきた河合雅司氏である。本書によれば、直近5年間の出生数は毎年4.54％ずつ減少しており、このペースで減り続ければ、日本人の人口は50年で半減し、100年後には8割減少すると述べられている。今後も少子化を止めることはできず、日本社会の激変は避けられないと断言している。本書は、このような「不都合な現実」を数値で説明し、多数の事例を用いて「日本崩壊」の予兆を紹介した上で、日本がとるべき方策を具体的に提示している。その答えは、「人口減少を前提とした社会」へ作り替えていくことである。タイトルの、『縮んで勝つ』ことこそが、日本の活路であることを明快に提示している。

本書は、3部から構成されているが、「はじめに」で本書で最も伝えたい内容がコンパクトにまとめられている。具体的には、政府や自治体がとる人口減少対策が対症療法的であり根本的な対策となっていないことが述べられている。その要因は、「現状維持バイアス」が強く働いており、それを取り除いて、「打って出る」必要があることを説いている。

続く、第1部では日本の人口減少が今後も継続し、100年で日本人の8割が減少することを多くのデータを用い、畳みかけるように伝えている。興味深い内容として「外国人」を労働者として受け入れることへの限界を示しており、移民との相違を指摘している点が挙げられる。このまま進むと、日本という国が残ったとしても、日本人がマイノリティになる可能性がある

ことを指摘している。

第2部は、16のセクションを通して、人口減少により日本の社会・経済や地域コミュニティが既に崩壊しはじめていることを紹介している。その分野は、交通、物流、公共サービス、教育、就業、住宅、買い物、医療、社会保障など多岐にわたっている。

第3部は、「人口減少を逆手に取る」と題して、日本がとるべき戦略を具体的に述べている。その内容は、以下の「7つの活路」として提案されている。

第1の活路　外国人依存から脱却（量的拡大という「成功体験」の否定）

第2の活路　女性の戦力化（労働集約型ビジネスモデルの否定）

第3の活路　「従業員1人あたりの利益」を経営目標に（生産性向上で個々の「稼ぐ力」をアップ）

第4の活路　デジタル技術による高付加価値化（「薄利多売」の量的成長モデルから「厚利少売」の質的成長モデルへ）

第5の活路　中小企業も独自に海外進出を（日本ならではの「キラーコンテンツ」の輸出）

第6の活路　全国に30万人規模の「独立国」を構築（地方自治体の単位で物事を捉えない）

第7の活路　「地域」を戦略的に縮める（「人口集積の二層化」という勝ち残り策）

最後の「おわりに」においては、超党派の国会議員が「人口減少戦略議連」を立ち上げ、対策が検討されはじめたことを紹介している。なお、巻頭には「衝撃シミュレーション」と題して図版による「100年間の人口減少予測」と、イラストによる「2023年生まれの未来図」が示されている。折り込み1ページの分量ではあるが、インパクトは大きく、本書の魅力を高めている。

本書の特徴を3点挙げる。第1に、短いフレーズの中に核心を突いた内容が密度高く盛り込まれている点である。とりわけ、第1部で示される現状把握と未来予測に関しては、「右肩上がりの価値観」を払拭するため、「不都合な現実」を突きつけてくる。第2に、統計から得られたエビデンスに基づいて論を展開している点である。これまでに構築したであろう膨大なデータベースを駆使した結果であり、著者の真骨頂といえる。第3に、本書は現状把握や問題の指摘に止まらず、処方箋を具体的に提示している点である。アカデミックな研究者は未来への提言は回避しがちである一方で、メディアからは玉石混交の情報が発信される傾向にあり、国民は手探りの歩みが続いている。本書では、我が国がとるべき方策を、冷静かつ大胆に提示されており、著者の責任感と使命感を感じずにはいられない。

本書のポイントを一言で述べるならば、人口減少を「割合」（率）で考えるのではなく、「総数」（値）で考えることによる「リアリティの表出」であると捉えることができる。日本は、既に「危険ゾーン」に入っているにも関わらず、国民全体が「ぬるま湯」に浸かり続けている状況である。その要因は、現状の的確な認識不足により「現状維持バイアス」が継続しているからであろう。多くの自治体や地域において地域づくり活動を実践している評者としても忸怩たる思いをしている。しかし、もはや批判や評論を継続する余裕は残されていない。私たちは、本書を座右に置き、直ちに「行動」していくことが求められている。本書を一読して、残された時間は少ないと痛感した。